
鹿に注意！ ~ Deer Crossing ~

越後のカリスマ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鹿に注意！〜Deer Crossing〜

【Nコード】

N1649F

【作者名】

越後のカリスマ

【あらすじ】

不運にも事故にあった青年と、彼を撥ねてしまった女性の物語。

路肩の茂みが揺れた。白線を跨いだそれは、前方を塞ぐようにして動きを止めた。オスの鹿だった。幾重にも枝わかれしたツノが凶器と化し、みるみるうちに迫り来る。歩道をしめす白線の内側は狭く、いつも僕は車道にはみ出して自転車を漕いでいた。もつとも、^{ひとけ}人気のない山道に歩道は必要ないと思われた。

ブレーキをかけても間に合いそうになかった。咄嗟にハンドルを右に切った僕は回避を試みた。紙一重になる、一か八かの賭けだった。センターライン付近まで膨らんだ自転車の側面すれすれを鹿のツノがかすめていく。少しだけ闘牛士の気分を味わえたような気がした。それを目で追いながら、どうやら回避できそうだと胸を撫で下ろしたときだった。真っ赤な車が、カーボン製のロードバイクに牙を剥こうとしていた。

「ギョエエエー！」

フロントガラスの向こうにいる女性運転手と視線がぶつかった。目を丸くした彼女は、口も同じようにあんぐりと開けていた。刹那、^{せつな}全身を衝撃が貫いた。

うつすらと瞼を開けたとき、ほとんど白一色だった。それがセンターラインだと気付くのに、さほど時間はかからなかった。うつ伏せで道路の中央に倒れていた僕は、おもむろに立ち上がって服を払った。降り注ぐ木漏れ日が、アスファルトに斑模様をつくっている。青々と茂った並木の葉が庇のような役割を果たしていた。

小鳥の轉りに混じって背後から空気が漏れるような、あるいは水分が蒸発するような音が耳に入ってくる。振り返った視線の先に、ボンネットから蒸気を上げる真っ赤な車の姿があった。

「あ、そう言えば……」

そこで、ようやく思い出した。自分は車に撥ねられたのだと。少
なく見積もっても二十メートルは飛ばされているようだった。僕は
全身をくまなくチェックした。血が出てやしないか、骨が折れてや
しないか、さすがに内臓のダメージはわからなかったが、どうやら
五体満足らしかった。

アーモンド型のヘルメットを被っている頭と違って、ピッチリと
身体にジャストフィットした半袖短パンの肘と膝は剥き出しだった。
あるうことか両方ともカスリ傷ひとつ負っていない。不思議なこと
もあるもんだ。僕は狐につままれたような気分で車の方へ足を向け
た。

赤い車は無残にも並木の太い幹に突っ込んでいた。クスノキの表
面を覆っていた皮が痛々しげに剥がれている。ひしゃげたボンネッ
トからは蒸気が上がり、オイルの二オイが鼻をついた。それでも車
高の低い流線型のボディは、一見して高級車だとわかる気品を纏っ
ていた。それは車に疎い高校生の僕にも容易に察しがついた。

「おっと、いけね」

運転手の女性は無事であろうか。フロントガラスは蜘蛛の巣状に
ヒビが走り、真っ白になって中は窺えない。

車の側面に回り込んだとき、ロードバイクの残骸が目飛び込んで
きた。車の前輪に下敷きにされたそれは、跡形もなく潰されていた。
見る影もなかった。高校への入学祝いとして、遠く離れた新潟に住
む祖父母から贈られた物だった。そのロードバイクは僕にとって一
番の宝物だった。友達のいない僕にとって相棒同然だった。

その場にしゃがみ込んだ僕の思考は、真っ赤な鮮血に遮られた。
地面に染み込むことなく流れてくる血は、感傷に浸る時間すら与え
てくれなかった。自転車は人間も道連れにしていた。その人はアー
モンド型のヘルメットを被っていた。身体にジャストフィットした
半袖にも短パンにも見覚えがあった。つまりそれは、僕自身のよう

だった。

小鳥の囀りで私は目を覚ました。直後、ハンドルを抱きかかえている自分の身に何が起こったのか計りかねた。真っ白いヒビの走るフロントガラスを見て、おぼろげに理解できた。自分は事故つたのだと。運転席から降りた私は、その光景に愕然がくぜんとした。

「まあ、なんてこと……」

ボンネットは飴細工あめざいくのようにひしゃげ、オイルの二オイが辺りに立ち込めていた。変わり果てた愛車を前にして、ただただ私は立ち尽くすしかなかった。パパに会わず顔がないと思った。

去年の春、大学の卒業祝いにと気の早いパパは、まだ免許のない末娘の私にポルシェをプレゼントしてくれた。私は周囲の反対を押し切って、自動車学校に通うことを両親に告げた。「金さえあれば何とでもなる」「危険だからおよしなさい」そういった両親の言葉に首を振った。いつまでも甘えん坊あつかいは癩しかだった。

足がけ一年に渡り自動車学校に通ったすえ、何度目かの筆記試験を経て念願だった免許を取得した。ことのほかパパは喜んでくれた。今日の午後、仕事の合間を縫ってパパと二人きりで、海岸へドライブに行く予定だった。忙しいパパと一緒に掛けるなんて奇跡的なことで、ママは年甲斐もなく嫉妬しつとしているようだった。

目玉のように飛び出したフロントライトを見下ろした。かるうじてぶら下っているそれを見て、どうやら約束は果たせそうにないと私は思った。ボンネットを挟んだ向こうに、妙なヘルメットを被った青年がいることに気付いた。そうよ、事故の発端となった出来事を思い出した。

「ちょっとあなた、急に飛び出してくるだんで、どういっつもり？」

「いや、僕だって好きで飛び出したんじゃないんですよ」

「言い訳はよしてちょうだい、死んだらどうするつもり？」

「ええと、もう死んでます」

うな垂れた彼は足元に視線を落とした。ボンネットが死角で見えなかった私は、ポルシェの後方から回り込んだ。オイルが何かだろう、青年の足元に水溜りのようなものができている。これが、どうしたというのか。しゃがみ込む途中で、その液体の正体に私は気付いた。そして、しゃがみきった瞬間、ポルシェの下から冷たい視線を感じた。

思わず飛びのいた私に向かって、僕ですと青年は呟いた。僕の死体ですと。まさか、恐る恐る私は覗き込んだ。なるほど、確かに似たようなヘルメットを被っている。

「ひよっとして、あなたは幽霊ってこと？」

「ええ、どうやらそのようです」

残念ながらと付け足した彼は、本当に残念そうだった。

もう手遅れだと言う彼の制止を振り切って、私はケータイで救急車を呼ぶことにした。しかし、一向に電話は繋がらない。人気のない山道だが液晶のアンテナは二本立っている。胸のポケットに入っていたせいだろうか、ぶつかった衝撃でケータイは私とハンドルにサンドウィッチにされたかもしれない。なかった。

「ええい、役立たずのコンコンチキツ！」

反対車線の茂みにケータイを投げ捨ててやろうと振りかぶったとき、背後からタイヤとアスファルトが奏でる低く呻くような音が聞こえてきた。私はヘリコプターを発見した遭難者のように、身を乗り出して両手を振った。黒塗りの改造車はヒップホップを撒き散らしながら走り去った。危うく轢かれかけた私は、したたかに尻もちをついた。

「なんて奴らなの、地獄に落ちてしまえ！」

「お姉さん、もう行きましよう」

「行くって、どこへ？」

「もちろん、天国ですよ」

ヘルメットをとった青年は、眩しそうに空を仰いだ。青々と茂った葉の間から、柔らかな陽光が漏れている。

「私は、無理よ」

「どうしてですか？」

「だって、私は……」

まだ死んでいないもの、という台詞を飲み込んだ。理由はどうであれ、彼の命を奪ったのは私自身だった。彼は真っ白くヒビ割れたポルシエのフロントガラスを見つめていた。

刹那、心臓が跳ねた。おもむろに立ち上がった私は、ポルシエの運転席を覗き込んだ。ハンドルを抱えたまま死んでいる私^がいた。路肩の茂みが揺れた。振り返った視線の先に鹿^がいた。おわり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1649f/>

鹿に注意！ ~ Deer Crossing ~

2010年10月28日07時02分発行